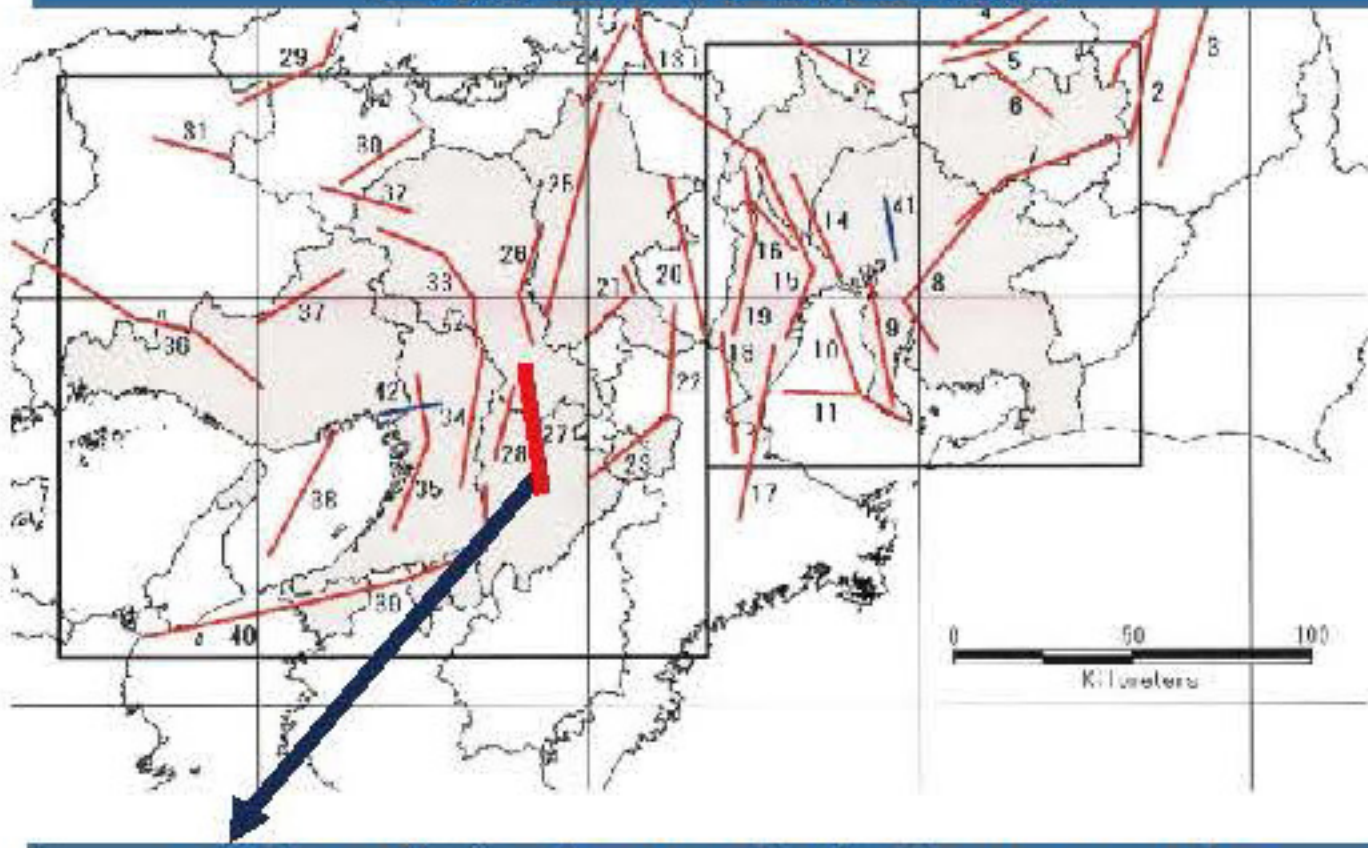


2. 奈良盆地東縁断層帯のような活断層と南海トラフ沿いの地震との関係

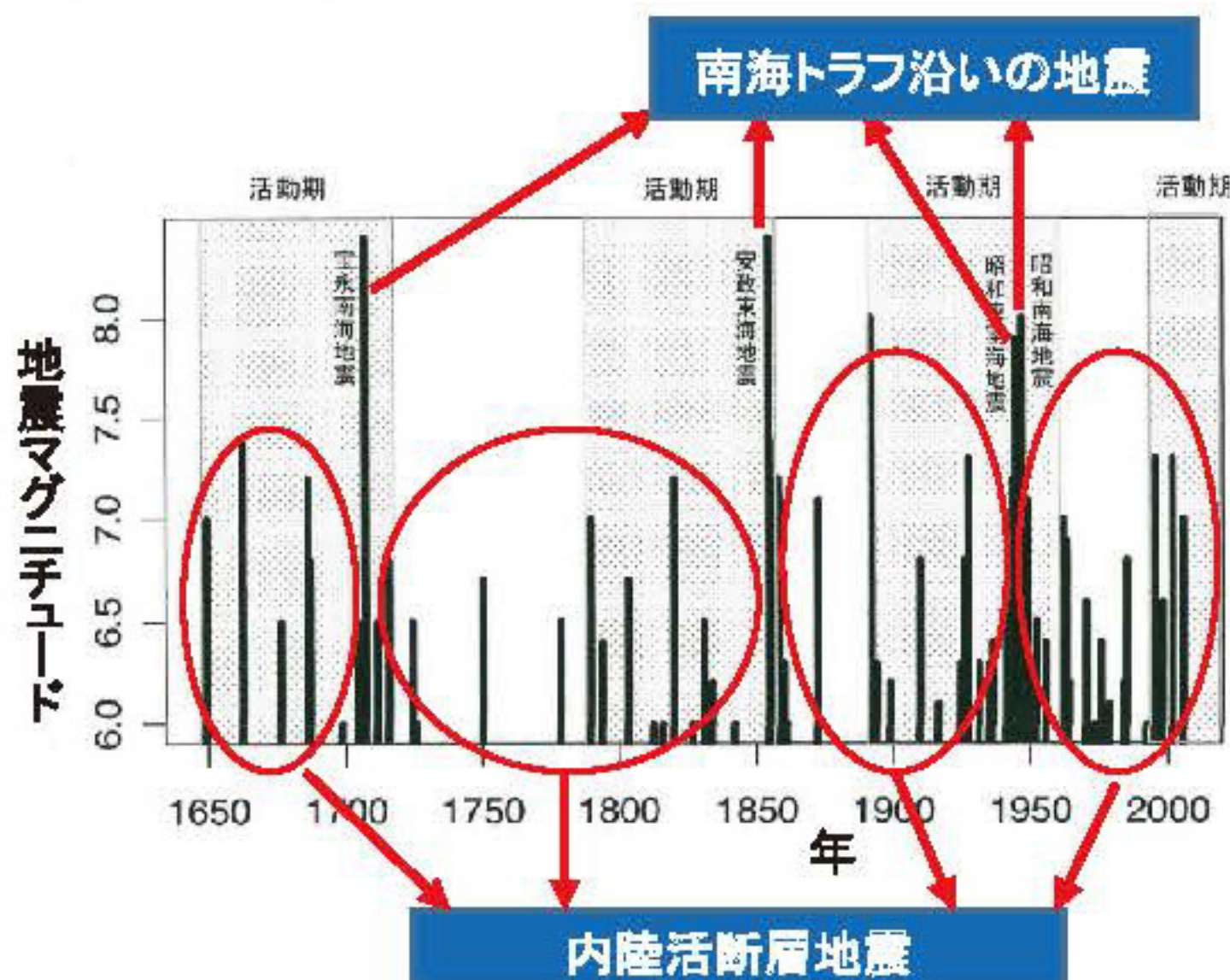
近畿地方と中部地方に存在する
主要な内陸活断層



これが奈良盆地東縁断層帯



しかし、その後の見直しによって、震源域は緑色の線まで拡大し、これが全体で動けば、地震マグニチュード9.0の巨大地震になることが懸念されています。



近畿地方には、マグニチュード7以上の地震を起こす活断層が約20あります。そのうち、天理市に最も大きな被害をもたらすのは、奈良盆地東縁断層帯地震です。

一方、潮岬沖の南海トラフに沿って南の方からフィリピン海プレートが日本列島の下に潜り込んでいます。この潜り込みに伴って、内陸に存在する活断層に徐々に歪エネルギーが蓄積します。

歴史的には、南海トラフに沿って約100～150年間隔でプレート境界地震（南海トラフ沿いの地震）が起こり、内陸部の活断層では、このプレート境界地震が起こる40年前付近から、地震が起こりやすくなります。1946年の昭和南海地震では、マグニチュード6以上の内陸活断層地震が事前に10個発生しました。

1つの活断層が地震を起こす間隔はおおよそ千年から数千年ですが、7より小さなマグニチュードの活断層を含めると、全国におおよそ2千あるといわれており、そのどれが動くかが事前にわからないのです。

いまわかっていることはつぎの南海トラフ地震が起こる前に、近畿地方の20ある内陸の活断層を含めて、マグニチュード7以下の無数にある活断層のどれかが地震を起こしてもおかしくないということです。ちなみに1995年阪神・淡路大震災後、マグニチュード6以上の内陸地震は7個発生しています。